特 論

凡例

- 一、本書は大悲菩薩に関する特殊の研究の成果を報告するものではない。又菩薩を伝して何らかの自家の主張を託するものでも勿論ない。唯半生侍座して聞き得た所を按排し菩薩の倂をうつし参らせて慕古の士に呈し祖恩の万一に報じ度い為ばかりである。
- 二、本書は長老随宜の談話垂示を筆記して置いたものを私意に任せて按排したものであるから章節の分ち、標目の附け方など不穩当の点は一切私の責である。文責本より私にある甚だ不完全で公表を愧づる次第だが菩薩の御一生をあらまし伝え得たことを信ずる。
- 三、宿縁の然らしむるところ、自分は今回応量坊を董することになった。菩薩接化の跡、入滅の地、冒瀆を懼れて薄氷を踏むの思であるが、本書印施の微功、聊か罪累を減し、且は応量坊廢絶の現状を多少にても興復し得るの縁とならば法悦之に過ぎない。
- 四、本書の編述に関し、某師から多大な助力を得た。記して之れを感謝す。

昭和七年春

融海 識

大悲菩薩伝

唐招提寺 第八十世長老 壬生寺貫主 北川智乘 口述

弟子 心量坊 壬生寺貫主 松浦融海 筆受

法園寺 壬生寺貫主 松浦俊海 校正

一 当代教界の概観

大悲菩薩が出現なされた時代は、あたかも日本仏教史上の華というべき鎌倉時代である。現今の仏教各宗は多く当時に開けたものであるが、諸宗の新興に先立って初期に当たって既に早く転回の気運が動いていた。というのは、平安朝の末期には僧侶が甚しく墮落していたので、これに対する反動とでもいうか、仏教内に非常に厳肅な風が起こって高僧が続々現われたのである。その中で特に傑出した人は、梅尾の明恵房高弁（一一七三～一二三二）と笠置の解脱房貞慶（一一五五～一二一三）であるが、この御二人については、各々熟知のことであろうからこれを略す。解脱上人のほうが一（二四九）が師事された方々である。

厳肅な生活を慕う当代の風潮は、その結果として、奈良朝に渡来し平安朝中期から廃絶した戒律復興の機運を胚胎し、促進するに至った。この律宗再興運動の中心人物が、実には大悲菩薩覚盛と興正菩薩叡尊（一一〇一～一一九〇）の二菩薩である。大悲菩薩の住された唐招提寺、興正菩薩の住された西大寺、それから東大寺には大悲菩薩の弟子であった実相房円照（一一二二～一二七七）がおられて、これで南都律宗の三大中心ができたわけである。円照上人の門からは示観国

師凝然（一二四〇～一二三二）が出られて、当代独歩の学匠であられたことは申すまでもない。

この頃、中国に渡って別に律を伝えて来て京都で弘めた人があるので、南都再興の律を南京律といい、京都新伝の律を北京律というようになったが、北京律の主要な人物は、月輪大師俊苜（一一六六～一二三七）と浄業（一一八七～一二五九）の二人である。浄業上人は戒光寺を建てて律を弘め、後に再び入宋して終に中国で寂せられた。俊苜上人は泉涌寺に入り、数百年の頽廢を興隆してその中興開山となられた。北京律の方は新伝の律というだけで、ともに四分南山律を依せるより、実際には大した影響もなかったように思われる。後代の律宗はもちろん、悉く南京律の系統である。

道元禪師（一二〇〇～一二五三）の曹洞禪、栄西禪師（一一四一～一二二五）以下二十四流の臨濟禪、法然上人（一一一三～一二二二）や親鸞聖人（一一七三～一二六二）の浄土教、日蓮聖人（一二三二～一二八二）の立教開宗と、仏教界は蘭菊の美を競った。鎌倉時代において南都古宗の一角に大悲菩薩が出現なされ、宗祖過海大師鑑真大和上（六八八～七六三）の真教を再興されたことは偶然でないのである。

二 略伝

イ、出生

菩薩の諱は覚盛、それで大悲菩薩覚盛と申し上げていることは各々御承知の通りである。その字は学律、『律苑僧宝伝』には号としてあるが、これは字の方が正しい。また自ら窮情と号せられたが、これは「未来際を窮めて有情を利益する」という意味から称されたものである。

菩薩は大和の服部村で御出生されたという。服部村というのは現今二ヶ所あって、一つは山辺郡の波多野村で、『和名類聚抄』にこの村のことが「服部（波止利）」と出ている。今一つは生駒郡の龍田町で、これは明治二十一年（一八八八）に龍田、五百井、神南、服部、稲葉、車瀬、目安、小吉田の八村を合併して龍田町とした。菩薩出生の地は、お

そらく前者であろうと思われるが、なお好學の士の踏査を希望する。また、御出生の家門姓氏も詳らかでないが、建久四年（一一九三）に御出生されたことは確かな事実である。伝承によれば、その日には奇瑞が多くあり、人みなこれを怪しんだという。建久四年は後鳥羽天皇の御宇で明恵上人がちょうど二十一歳の時、興正菩薩の出生に先立つこと八年である。

口、少年時代、得度受業

幼少の頃から俊逸で骨相雄偉、自ら大人の風格があつて、殊の外眼光の鋭い御方で、遇う者悉くその威に打たれて、畏敬の念を生じたと伝えられる。各種伝記は大概同じようなことを記しているが、とにかく道器自然に具わり秀でて、常人と異なるところあるは当然のことである。八歳にして早くも出塵の志を起こされ、興福寺の金善法師（生没年未詳）を礼して剃髪なされ、昼は學業を修し、夜は趺坐して觀法を修せられた。「俱舍唯識の諸書、研究せざるはなし」というから、少年時代から青年期にかけては日々精進を重ね、定慧兼ね修せられたことと思われる。

建暦二年（一一二二）、解脱上人が律法興隆の為に、時の英衲^⑧二十人を選んで興福寺の常喜院に集め律教を専修せしめられたが、菩薩もこの中に加わりなされた。ちょうど二十歳の御時で、衆中の最年少者であつた。したがつて、一番末座に御出でなされたが、慧觀絶倫比肩する者なく、この方では一番の上座であつた。ある日のこと、解脱上人は英衲二十人の名簿を点檢なされ、菩薩の諱の字に爪型を入れて、「他日照世の慧灯となる者は、必ずこの覺盛子であろう」と嘆息された。これより大衆注視の的となつて、重きをなされたということである。

貞応二年（一一二三）の夏、初めて常喜院に安居して専ら律藏を學し、戒珠を瑩かにせられた。

ハ、遊方修學

この頃はあたかも明恵上人の盛んな時で、梅尾の道風天下を風靡した。菩薩はまた錫^⑨を飛ばして高山寺に趨り、上人

に依止して華嚴の玄奥を研めなされた。誠に麟鳳龍象の会遇を想うだに有難きことである。すべて正法の興る時は、こうした師資の縁の醇熟するものである。それはさておき、菩薩御自身にはまだ律法の興らぬをもって遺憾に思召され、この点では上人の下にあつても深い御満足はなかつた。

当時、知足房戒如上人（生没年未詳）は興福寺の知足坊に出世なされて道誉高く、貞慶和尚に従つて戒教を学し、常に律講をもつて任とせられ、一代の律匠であつたから、菩薩は戒如上人に依止して律部を質し、『梵網古迹記』等を御聴きなされた。ついには法を継いで常喜院に住し、専ら興律をもつて任とせらるるに至つた。

二、自誓得戒

菩薩がかつて仰せらるるには、「近時は慧学のみを貴んで戒を持せぬが、これでは仏子と称することは出来ぬ。自分はこの断絶した律法を興そうと思うが、誰か同志の者はいないか」と。衆の申すには、「今信心を發しまして後來の程は計り知れませぬ。前に誉れあるよりも後で毀れない方が宜しき故、まあ光を匿し徳を隠して居る方がよからうと存じます」と。それで菩薩の言わるるには、「仏は精進を貴ぶ、毀誉は畏るる所でない」と、固い御決心であつた。

ある日、長谷寺に参詣なされたが、途中雨に逢うて釜の口の南、柳本の社頭に立寄り拝殿でお待ちになつた。この時、偶然一人の僧に遇うて種々御法談あり。律門のことをもお話しなされたが、菩薩の仰せらるるには、「占察」¹⁴『瑜伽』の所説によると、自誓受羯磨を以て戒法を禀受すれば七衆各各得戒して、而もその性を成ずるとの事である」と。この時に西大寺の叡尊律師は傍にあつてこれを聞き、随喜渴仰せられた。そこで御二人の間に久しく御対談があり、菩薩は同志を得て殊の外お喜びになつて断金の契りを結ばれ、この時以來、ますます興律の志を励まされた。嘉禎元年（一二三五）、菩薩は常喜院で『表無表章』を講ぜられたが、叡尊律師等がお聴きになり、また七衆成性の教義をも受けられた。その後、叡尊律師は生駒の鬼取に籠つて『行事鈔』を稽古なされたが、この山居の間に菩薩は浄仕の僧を遣わして、律法再興のことを促されたところ、律師は大いに喜んで、錫を飛ばしてお出掛けなされた。時に人王第八十七代四条天

皇の嘉禎二年（一二三六）丙申八月下旬、ついに菩薩と尊性房円晴（？～一二四一）、慈禅房有嚴（一一八六～一二七五）、叡尊律師との四人は伴を結んで、経説により通受の規則に随って、東大寺の法華堂（また絹索堂、金鐘寺という。俗に三月堂と呼ぶ）に参籠して好相を祈られた。菩薩は弥勒菩薩を本尊として祈請遊ばされたが、ついに瑞応を感じて蓮華の天より降り、あるいは空中に飛び、あるいは地上に墜ち、繽紛^⑰として錦繡をしくの趣があった。かくて好相を得、九月朔日、東大寺大仏殿の前で尊性、慈禅の二師を証明として、大乘三聚通受の法によって興正菩薩とともに近事戒を成じ、同二日に勤策戒^⑱、第四日午時上分に大苾芻戒をお受けなされた。時に菩薩御年四十四歳、これが我が国では通受比丘自誓受具の最初である。これより学路漸く開けて、菩薩大僧天下に遍き、法林栄えて戒華薫馥し、正法の世となったのである。他の三師も同時に自誓得戒遊ばされた。

ホ、度生

菩薩は自誓得戒の後、律幢を興福寺の松院に樹立して、大いに七衆通受成性受戒の義を証道せられ、通別二受の法を開かれ、道俗争い来ってその利益に与つたが、まことに解脱上人の照鑑に違わず、堂々照世の慧灯となられたのである。この七衆通受成性の義は、天台の伝教大師最澄（七六七～八二二）が『顕戒論』を撰出してより以来、南都北嶺の争論となつて、爾来南都にありては、春日安居屋において学僧の研究問題として年々研究を重ねてきたが、決了を見るに至らず、解脱上人、明恵上人のごとき高僧知識ですら、その是非を決するに至らなかつた一大難点である。しかるに大悲菩薩によつて、南都北嶺両者の主張は、何れも仏意に契わざる不了義なることを看破せられ、『占察経』『瑜伽論』の説に依りて、如法に自誓得戒なされた。総じて画期的なことは時流の容るるところとならぬが、菩薩の成性の新義も時の学者は許さなかつた。そこで嘉禎四年（一二三八）、『菩薩戒通別二受鈔』一卷を撰出して成性の義を明らかにせられ、東大寺学頭廻心房真空（一二〇四～一二六八）、興福寺学頭信願房良遍（一一九四～一二五二）のごとき時の龍象が、大いに感動して菩薩の門に入り戒を受けてからは、天下の学者大いに驚き菩薩成性の義を信するに至つたが、まだまだ疑を

懐く者少なからず、後に述べるように、寛元二年（一二四四）、十六羅漢の使者帝釈天の降臨、同四年（一二四六）の『菩薩戒通受遺疑鈔』一卷の撰述等によって天下悉く成性受戒、僧宝再興を信するに至った。伽藍の荒廢を興したとか、創建したとかいう意味の中興ではない。仏説正法の生命を復活なされた「真実の仏法中興の祖」と申すべきである。日本律宗の中祖と尊重し来れる真義はこの点にある。以下、年序に従って主要な御事蹟を述べるが、以上と重複するところなどは、この意味を体して見られたい。

曆仁元年（一二三八）十月二十八日、叡尊律師が西大寺を結界せられた時、菩薩は請を受けてその羯磨を乗られた、同二十九日に四分布薩を行われたが、昇座説戒の始めに当たって、卒然として涙を拭われたので、叡尊律師が問われるに、「説戒の際、何の感が有って啼涙したまうぞ」と。菩薩答えて言われるに、「吾かつて布薩をなす毎に、持戒清淨を唱うるに至って私かに念えらく、「戒根清淨ならずして妄に是の如き言を唱うるはこれ自ら欺き他を欺くもの」と。図らずも今日この勝会に与って、如法に布薩を行うに当たって悲喜交々に迫り、覚えず感涙を催した次第である」と。

仁治元年（一二四〇）春、『梵網經』を講ぜられた時は、極樂院の良觀房忍性（一二一七―一三〇三）等が講座に陪した。この年、四条天皇は菩薩の戒徳を聞き召され、禁中に請じて菩薩大戒をお受けになり、次いで后妃公卿等も多く受戒せられた。

寛元元年（一二四三）春、三月十八日から二十五日まで、服寺²⁴において始めて釈迦大念仏会を開いて永式となされた。思うに服部は菩薩御出生の故郷であるから、この大念仏会は父母の追孝に擬せられたものであろう。

同年夏五月、菩薩は発願して常喜院安居坊第三室において、六道衆生拔苦与樂身心安樂菩提心三聚淨戒成就円満の為に、自ら『法華三部經』都合十卷、および『四分戒本』『梵網經』等若干卷を書写せられ、翌年甲辰春に至って、その功を了せられた。

寛元二年（一二四四）二月、唐招提寺に移って盛んに宗祖大師の宗風を闡揚せられ、為に一山の鐘鼓音を改め祖道大いに振い、如法の律師彬々として興り、如説の律義聖代さながらに起こるに至った。

同年夏四月十四日、衆僧四十六人を集めて舍利会を講堂に開かれたが、梵唄伶楽の声、山嶽に震うの盛儀であった。次いで四分布薩を行い、翌日梵網布薩を行われたが、菩薩昇座して布薩を終え、大衆を率いて三聚坊に集まられた時、一道の金光、坊の西より起って光中に一神人が出現した。身長一丈余、冠裳壮麗にして人目を眩するばかり、比丘教円（生没年未詳）が進前してこの神人に問う、「御身は何人ぞや」と。神人答う、「我はこれ三十三天の主、帝釈天なり。覺盛大徳は無上大菩提心を発して国に絶えんとする律法を紹隆して僧宝を興し、初めて布薩を行す。我、随喜感嘆の余り十六阿羅漢の使者となりて、証明の為に降臨す」と。また曰く、「比丘僧は既に備わると雖も、比丘尼は未だ具わらず、我先ず汝を以て尼となさん」と。神人が言い終わって隠れると、異香が寺中に満ち奇瑞渴仰を催し、教円比丘は忽ちに男を転じて女と成った。十六羅漢と帝釈天の威神力に一衆悉く該嘆したが、既に女身と成った教円は衆を辞して故郷に帰り、その姉某を諭して出家せしめ、信如（生没年未詳）と名付けた。ここにおいて、菩薩はさらに十六羅漢を勧請して、如来真身舍利の御前において叡尊律師等を証明として、始めて大比丘尼戒を授けられ、ここに七衆完備することを得た。後に正法寺、法華寺の尼衆は皆、菩薩と叡尊律師とに従って進具した。

ちなみに、この帝釈天降臨の地は、当時の唐招提寺僧堂（食堂とも称す）東北角、すなわち、現今の訶利帝母社付近であるが、後醍醐天皇の元徳元年（一三二九）五月、ここに碑を建てて帝釈天の威徳を顕彰したという（当時の碑は散逸しており、令和元年五月十九日に再建される）。『招提千歳伝記』の記録によって、その碑文を掲げておこう。

尊哉覺盛師 恭性智將悲 遐昌亡律法 更興絶戒藏 十願誓永代 四依志陳創
親釈提來觀 時羅漢証和 七衆分階級 二受定猷規 誰弗潤夫賜 請呈此硯碑

寛元三年（一二四五）秋九月、白四羯磨をもって衆の為に具戒を授けんと思された時に、叡尊律師の曰く、「律に曰わす、『九夏の和上、得戒得罪す』と。依りて明年を俟って行われて然るべきか」と。菩薩の曰く、「人命期し難く正法遇い難し、今にして行ぜざれば恐らくは戒伝を失せん。若し人をして得戒せしめば、他また何をか恤へん」と。叡尊律師、その言を壮とし遂に徒を率いて泉州家原寺に至り戒場を結し、九月十三日に始めて菩薩別受の法を行い戒和上となられ

た。菩薩、後には唐招提寺に帰って「南山三大部」を講ずること一過、その余の小部も悉く闡明せられ、法筵の盛り、開山大師の在世を髣髴とせしめた。しかるに、なお通受の一門に疑難を抱く者あり。為に寛元四年（一二四六）冬十一月、『菩薩戒通受遺疑鈔』一卷を撰せられ、これによって諸宗の疑者悉く信伏して、また是非を挿む者もなくなった。けだし我が朝の保安年間（一二二〇～一二二四）以来、興律の諸師ありといえども、高邁卓抜古今に独歩せる者はただ大悲菩薩の所立のみである。まことに本朝律宗中興第一祖と仰がるるも、もとよりその所以と申すべきである。

法性寺道家公（一一九三～一二五二）は、菩薩に従って戒を受け弟子の礼をとり、しばしば戒法を問い篤く尊崇あつたということである。なお、晩年は応量坊にあって撰化利生なされたが、この応量坊は宝治元年（一二四七）七月の落成で、菩薩入滅二年前のことである。総じて僧坊の建立にはその用材資金共に邪命得を離れ、量なども律儀如法に應ずるをもつて主要とする。そこで菩薩は唐招提寺に移住なされてから、宝治元年（一二四七）の夏、宝蔵経蔵以東の地を探り、仏制に従い如法に僧坊を建立して応量坊と称し、ここに常在なされた。世人が菩薩を応量上人と申し上げているのは、この因縁に依る。

寛元二年（一二四四）、常喜院安居坊で、弘法利生国土豊饒持戒威力を祈る為に書写せられた『四分戒本』一卷、『梵網経』上下二卷、『法華三部経』都合十卷、『大乘百法論』一卷、『宝篋印陀羅尼経』一卷、『般若心経』一卷、『唯識三十頌』一卷等を宝治元年（一二四七）七月二十五日、塔を造って納め、応量坊に奉納して同月二十七、八、九の三ヶ日、大衆を屈請して大齋会を設け経供養を修せられた。この供養塔は何時の頃か滅して伝わらぬが、経巻は元禄十一年（一六九八）五月、桂昌院宗子尼（一二二七～一七〇五）が三重函を奉納されて、現在は重要文化財に指定されて宝庫内に納められている。

へ、入滅

建長元年（一二四九）五月十日、菩薩は初めて四大不調を覚える。臨終には応量坊で新たに浄服に着更え僧伽梨を着

け、頭北面西、右手を頬につけ左手に香炉をとり、大乘の文を唱え安然として遷化遊ばされた。実に十九日亥刻のこと、御齡五十七、僧夏即ち自誓通受の後、十二年、唐招提寺の主務を治すること六年であつた。鑑素は哀慟し父母を喪う如く、門人は全身を奉撃して本山の西方院に葬り、塔を建てて厚く末代供養頂礼の重本となし、応量坊には御影像を造つて奉安したが、御像の胎内銘には左の文字がある。なお、この御影像、今は開山堂右脇（平成十一年以降は中興堂正面）に奉安し、重要文化財に指定せられている。

于時（一三九五）永二年八月十七日 奉造立之所也

唐招提寺大仏師成慶 康慶法眼三流 南都興福寺住

元祿六（一六九三）西年八月十八日 奉再興仕立招提寺大仏師法橋弘順常安（花押）

三 門流諸師略伝

まず、菩薩とともに自誓得戒された三師の略伝を述べるが、これは門流といつても、同侶に当たる人である。

◎尊性律師 円晴、照真と号し、興福寺不空院の住僧であつたが、自誓得戒の後、洛北の雲林院に移つて律宗を弘める。仁治二年（一二四二）に嵯峨で入寂せられたが、日は明らかでない。春秋六十二歳。

◎慈禪上人 有嚴、如願、長認と号す。始め常喜院に住し、律を戒如上人に受け、後には唐招提寺に住し、自誓得戒の後、寛元四年（一二四六）秋、吉野覚如律師（生没年未詳）とともに入宋なされて諸師に謁し戒律章疏を索問せられた。帰朝の後、唐招提寺で戒行を専修されたが、老衰して戒行精白ならざるに、宗祖の結界地に住持するは懼れありとて、ついに界外に西方・妙香の二別院を開き、持斎を円にして朝に密観、夕に念仏を修し、凡身を脱し常に円光身に現じ、建治元年（一二七五）十一月十一日、椅に倚つて外縛印を結び、西方に向かつて寂せられた。春秋九十。

◎叡尊律師 名は思円、諡号は興正菩薩。最初『行事鈔』を尊性律師に聴き、後には大悲菩薩に随つて『表無表章』を

学び、通別二受の講を聴き、自誓得戒の後は西大寺の宝塔院に住して顕密の宗を興され、近くは戒光大徳（生没年未詳）の伝授によって律儀を興し受具を全うせられた。無論、唐招提寺・東大寺戒壇院の門派と称すべき方なれども、戒体は自誓に依り発得なされ、別に一方に化を布かれた方なので、東大・招提嫡流相承の根本に対しては、中間一往傍出の末葉と申すべきである（凝然上人『伝律図源解集』の説を採る）。正応三年（一二九〇）八月二十五日寂。春秋九十。なお、『慈光律師年譜』三卷に行状が詳記されている。

次に、直接菩薩に師事して、法を嗣いだ人々のことを述べる。

◎良遍 号は信願。貞永元年（一二三二）、四十八歳にして生駒の大聖竹林寺に隱遁せられたが、嘉禎年間（一二三五～一二三八）、大悲菩薩に従って満分戒を受けた後、書を著して大いに菩薩の化を輔けられた。かつて聖一国師（一二〇二～一二八〇）に謁してその著『真心要訣』を呈し、国師の称賛を得られたことがある。建長四年（一二五二）、六十九歳で入滅せられた。著述には『通受文理鈔』『止防用心』『別受行否』『通受懺法』『苾芻略要義』『表無表章鈔』等があり、また大悲菩薩の撰述を潤色した『二受鈔』がある。

◎真空 字は廻心、中観と号す。幼時に醍醐の理性院の行賢阿闍梨（生没年未詳）の下で剃髮し、後に南都東南院の貞禪法師（生没年未詳）に三論を学び、また醍醐に帰って密教の奥秘を伝えたが、嘉禎三年（一二三七）大悲菩薩に松院で謁してから、機縁契い満分戒を受け律典を究め、後に木幡の観音院に化を闡かれ、また八条禅尼（一一九三～一二七四）の屈請によって萬祥山大通寺の開山第一祖となられた。文永五年（一二六八）七月八日入滅。著書に『往生論註鈔』『十因文集』『三廟鈔』等がある。

◎証玄 字は円律。嘉禎三年（一二三七）秋、菩薩に従って息慈戒を常喜院に、具戒を松院に受けられたが、年十八歳の寛元年間（一二四三～一二四七）、家原寺に至って別受法によって具戒重受あり。建長元年（一二四九）、菩薩が遷化の後、囑を受けて招提を紹ぎ、四十余年間、化を盛んにせられた。正応五年（一二九二）八月十四日入滅。寿七十三、夏五十五。

◎聖守 号は中道。憲深（一一九二～一二六三）門下の碩学で、また樹慶大徳（生没年未詳）から三論を学ばれて、教学の大家として重きをなした。東大寺真言院に顕密二教を弘め、嘉禎年間（一二三五～一二三八）に菩薩に従って具戒を重受なされた。石清水檢校の行清公（一二二九～一二七九）は梵刹を建てて、師を請じて開山としたのが、山城の法園寺である。正応四年（一二九二）十一月二十七日、七十三歳で入滅せられた。

◎円照 号は実相。先の中道上人の弟で、大悲菩薩に具戒を受け毘尼に精通し、また信願上人によって教相を究め諸宗に通じられた。戒壇院を復興して律密二教を弘め、講席の盛は当時比類なく、その後、善法寺・金山院等十余ヶ処の梵刹に抛られた。平生月輪観^⑤を修し、身には光明あつて夜間に灯燭を用いなくて、誦経や書写をされたという。建治三年（一二七七）十月二十二日入滅。寿五十七。

◎信如 先に述べた転男教円尼の姉で、菩薩に従って沙弥尼・式叉摩那を経て、ついに大比丘尼戒を受け、聖徳太子の御母間人皇后（？～六六五）開基の中宮寺を中興して住した。皇后の諱辰^⑦を太子の夢告によって、天寿国曼荼羅を感得して知ったという奇瑞が伝えられている。かつて大和の瀧市郷に正法尼寺を建てて開山となり、建長元年（一二四九）三月晦日に結界してからは、数十の大尼沙弥尼が聚って一大伽藍となった。その四月二日から釈迦大念仏会を開き、度生弘律ななか化益の盛んな尼律師であった。

慶運戒学律師は橘寺に住し、本性禅慧律師は大安寺に住して律教を闡揚し衆望を荷い、律苑の鸞鳳と称せられた人々である。この外、入阿、思蓮、乗心、賢明、禅忍、静慶、寂恵、密嚴等通じて十五名の法嗣がいる。

四 著書

- 一、表無表章文集 七卷（現今は流布せず）
- 二、菩薩戒宗要文集 一卷（写本）
- 三、菩薩戒通別二受鈔 一卷（刊本）
- 四、菩薩戒通受遣疑鈔 一卷（刊本）

- 五、釈迦十二礼 (刊本)
- 七、招提三時勤行式 (写本)
- 九、十大願 (刊本)
- 六、七仏略戒經 (刊本)
- 八、律宗新学作持要文 一卷 (刊本)

五 後人の讃仰

◎菩薩が入滅の時、西大寺の叡尊律師は来つて悲恋哀悼なされた。その辞に「盛公戒珠疵無く道眼是れ明なり、加之、輪輿は堂宇一時に鼎新し、金碧間錯、京畿に輝映す。道名燁々として華夷に光被す。化縁茲に尽きて遂に他邦に去る。梁木壞して法社何ぞ康からん。我に寸善有れば公必ず力めて揚ぐ。常に法愛に沐して心に銘じて忘れず、鳥吟風韻尽くこれ悲傷す。風神を想見すれば涙下て衣を沾す」と言う。

◎滅後百ヶ日忌辰に、大齋会を修して『教誡律儀』を印施し、その志趣に「唐招提寺盛師の靈、生前の誓願決定成就の為に寺々の大衆一味和合して、この版印百五十巻を彫み奉り、百日の緯辰に普く出家の人に施す」と言う。

◎菩薩は平生菩薩の大願に住し、猛夏に禅室に坐して蚊虻が刺すに委せられた。法縁の老翁見るに忍びず、団扇を作つて願行を助け参らせた。この因縁から菩薩の月忌日、五月十九日の中興忌に、衆中は団扇を作つて祖前に奉納し、梵網講讚を修して一日一夜光明真言三昧を修するのが恒例となつた。会式が終わると団扇を撒き参詣者に拾わせるが、里俗はこれを虫除け、雷除けのお守りとする。これら誠に菩薩威徳の余光とでも申すべきである。

◎滅後三年して西大寺の叡尊律師は夢を見られたが、その夢に菩薩が律師に告げて曰わるるには「吾は補陀落山に化生し、千僧の首として大いに群生を度す。同伴に知らしめば則ち可なり」と。夢覚めれば平明三下の鐘聞こえる頃であつた。道俗は伝え聞いて、驚きかつ随喜したということである。

◎戒山大徳の菩薩伝の賛に曰く「それ外に待つ有る者時と勢と得て之を局す。外に待つ無き者、時と勢と得て局る可き

に非ざる也。大悲菩薩は律法衰残の秋に於て粹然として出で、『占察』『瑜伽』の明文に依つて通受の法を立て、大地人をして尽く古道の顔色を見しむ、謂つべし非常の人超世の傑と、その大法を荷負し有情を提携するの功、古の鑑真を視るも未だ必しも愧あらざる也。嗚呼、大悲の自立する所の若き者、あに時勢を以て之を局らん乎。子輿氏曰く「豪傑の士文王無しと雖も猶興る」と。洵に誣いざるなり」と。

◎義澄律師（二六七六―一七一）の菩薩伝の賛に曰く「物発すれば必ず中廢あり。若し中興せざれば則ち定て断ず。古に曰く「五百年にして必ず聖人出ることあり」と。この言は実なる哉。吾が高祖鑑真大師は天平の聖代にこの国に来至し、始めて毘尼の教を弘め、この辺地の下凡をして彼の大仙の威儀を習わしむ。然るに時已に五百春秋を去り吾が法既に廢す。爰に大悲菩薩は超然として天福の明世に出世し、甘露を將に枯れなんとするに灑ぎ、この大地の人をして再び太古の真風を扇がしむ。実にこの恩の大なる哉。故に吾朝戒宗中興第一祖に仰ぐ。加うに生を吾国に垂るれば天帝来賛し、神を孤岸に転ずれば異僧敬仰す。彼の芝祖の所謂「生ては毘尼を弘め、死しては安養に帰せん」と。師も亦之に倣うか。但だ西方と白華と異なるのみ。その戒業や雪の如く、その慧解や氷の如し。飄然たる天性は孤雲野鶴の留礙する所無きが如く。声巷燐々として扶桑の間⁴⁷に鳴る。これ故に遠くは南山を支えて日月と光を争い、近くは靈芝に比して龍虎と威を論ず。伏して尊公の夢を顧みれば、恐らくは師はこれ真公の再来か。爾らずんば何ぞ能くこれに至らんや。嗚呼、区々たる小子、奚ぞ夫れ称賛する所ならん哉。然れども千百に一二を存して、聊か厥の洪恩に報ずるのみ」と。

◎師蠻禪師（二六二六―一七一〇）の賛に曰く「規矩に絆れずして能く用る者は、豪傑の士に非ずんば則ち不可なり。鑑真和尚肇めて律儀を伝えて東西の二壇専ら別受を行う。数世を歴て戒師続かず。招提の振わざること四百五十余年如来の淨戒を吠敵の殘僧に委するに至れり。盛公間出の時を以て奮然として忍びず。遂に作者二人と与に瑜伽の明文に拠て自誓受戒す。絆れずして能く規矩を用うるに非ずや。この時に当たつて衆議は騰涌すれども心に芥蒂と為さず、確乎として自立す。其の志成り道亨るに及んで、邦畿は雷同して通別の二戒を家々に弘め戸々に受く。始め孔た艱めると雖、卒に易さが若く然り、大に招提中興の業を開く。亦所謂豪傑の士なり。その聖主の寵を受け、帝釈の使を感ずるを觀れ

ば、南山宣師の軌躅と相似たり異なる哉。因て謂えらく「釈氏⁴⁹たる者各々盛公の勇を懐かば、家々の正法地に墜ちず。舜何人ぞや、為すこと有る時は皆是なり」と。古人の格言盛公に之を見る。昔宋の慈光寺の晤恩法師一たび布薩する毎に潜洒止まず。蓋し無戒の者洲に満つの説を思うて也。彼は知らざる者の為にして、慨し此は勝遇を感じて漣たるのみ。其の願輪を言わば共に一轍に合す。

大悲菩薩伝 終

大悲菩薩覺盛年表

建久四年	二九三	●覺盛が和州服部郷に生まれる。一説には建久五年とも。
六年	二九五	○三月、東大寺を慶す。行幸あり。
八年	二九七	○東大寺戒壇院金堂成る。
正治元年	二九九	○四月、俊苧が入宋する。
二年	三〇〇	●覺盛が興福寺に入る。八歳。
建仁元年	三〇一	○叡尊が生まれる。
承元二年	三〇八	○貞慶が海住山寺へ移り住む。
建暦元年	三一一	○二月、俊苧が帰国。律書三百二十七卷を將來す。
二年	三一二	○九月十三日、貞慶が唐招提寺御影堂で『梵網古迹記』を講ず。
		○貞慶が常喜院を建て律講を開く。
		●覺盛が貞慶の門に入る。二十歳。
建保元年	三二三	○二月、貞慶が海住山寺老宿坊にて寂す。五十九歳。
三年	三二五	○叡尊が剃髮する。一説には建保五年とも。
五年	三二七	○七月十五日、忍性が生まれる。

●は覺盛の足跡、○は関連事項を示す。

承久元年	二二九	○十月二十日、弁円（聖一国師）が東大寺にて登壇受戒す。
二年	二三〇	○明恵が石水院で菩薩戒疏を興行す。
三年	二三一	○円照が生まれる。
貞応二年	二三三	●覚盛が高山寺に高弁を訪ねて華嚴を学す。
元仁元年	二三四	○十月、北条泰時が菩薩戒を俊仍に受ける。
安貞元年	二三七	○三月八日、俊仍が遷化する。世寿六十二、夏臘四十四。
二年	二三八	●十二月二十一日、覚盛が『菩薩戒宗要雜文集』一卷を撰す。
寛喜元年	二二九	○五月、高弁が月次授戒会を行う。
貞永元年	二三三	○一月、高弁が寂す。
天福元年	二三三	○八月二十八日、良遍が生駒の竹林寺にて寂す。
		○浄業が再入宋。
		○四月十一日、忍性が東大寺にて通受戒。
文暦元年	二三四	○忍性が生駒の竹林寺に月参、『断食五字咒』を唱う。
嘉禎元年	二三五	○叡尊が西大寺に入る。一説に暦仁元年とも。
		●覚盛が常喜院にて『表無表章』を講ず。四十三歳。
二年	二三六	●八月二十六日、覚盛が絹索堂にて自誓受好相を祈り、二十八日に成就す。三十日に大仏殿に参籠し三時行法。九月一日に近事戒、二日に勤策戒、四日に具足戒を通受。
三年	二三七	●秋、覚盛が常喜院にて証玄に沙弥戒、冬、松院にて具足戒を授戒。
		●覚盛が松院で律講、真空が入門。
		●覚盛が良遍に具足戒を授戒。（律苑十二、嘉禎年中）
		●十月二十八日、覚盛が西大寺にて結界の羯磨を行す。
暦仁元年	二三八	●十月二十九日、覚盛が西大寺にて四分布薩説戒す。

仁治元年	二四〇	○三月六日、凝然が生まれる。 ●春、覚盛が梵網を講ず。
二年	二四一	●天皇が覚盛に菩薩戒を受けたまう。 ●覚盛が海龍王寺の玄忍に具足戒を授戒。 ○円晴が嵯峨山で寂す。
寛元元年	二四三	●三月十八日、服寺で父母追孝の為に一七日釈迦大念仏会を開く。
		●五月十六日、覚盛が常喜院にて『四分』『梵網』『大乘百法論』等を書す。
		●九月二十八日、『法華経』を書写。
		○覚盛が賢明に具足戒を授戒す。
二年	二四四	●二月二十四日、覚盛が唐招提寺に入る。
		○四月十日、良遍が白毫寺で病臥中に、覚盛の『菩薩戒通別二受鈔』を飾厳す。
		●四月十四日、十五日、覚盛が唐招提寺で四分梵網布薩。十四日、講堂にて舍利会、叡尊による四分説戒。十五日、覚盛による梵網説戒、帝釈天降臨。
		●四月十七日、覚盛が信如の為に初めて尼衆授戒す。
		●覚盛が玄忍に具足戒を授戒。
三年	二四五	●九月十三日、覚盛が白四羯磨により具戒を行す。
		●覚盛が家原寺で諸弟子の為に別受戒を授ける。忍性が受ける。
		●覚盛が唐招提寺で南山三大部を講ず。
		○叡尊が法華寺尼衆の為に沙弥尼戒を授ける。
四年	二四六	●覚盛が『菩薩戒通受遣疑鈔』一卷を撰す。
宝治元年	二四七	●七月五日、覚盛が『唯識三十頌』『般若心経』を書写す。 ○七月十八日、応量坊落成。

二年	建長元年
二四八	二四九
<ul style="list-style-type: none"> ● 七月二十五日、覚盛が書写した経を塔に納め応量坊に置く。 ● 七月二十七日、二十八日、二十九日、覚盛が応量坊で塔供養齋会を設ける。 ● 覚盛が『律宗新学持要文』一巻を撰す。 ● 三月晦日、信如尼が正法尼寺を建て、覚盛がこれを結界す。 ○ 四月二日、信如尼が正法尼寺で釈迦念仏会を開く。 ● 五月十九日、覚盛が寂す。世寿五十七、通夏十二。 ● 九月一日、証玄が覚盛菩薩の為に大齋会を修し、『教誠儀』一五〇巻を印施す。 	

語句解説

- ①南都＝奈良の都のこと。京都は北京。②未来際＝未来の果てに至るまで。未来永劫。③有情＝感情や意識など、心の動きを有するもの。人間・鳥獸など。衆生。④出塵の志＝俗世間の汚れから逃れること。出家して僧となること。⑤跣坐＝跣とは足の甲のこと。結跏趺して坐ること。⑥俱舍唯識＝中国・東アジアの仏教宗派の二つ。⑦定慧＝互いにかかり合って仏道を成就させる関係にある、禪定と智慧。⑧英衲＝秀でた僧侶。⑨錫を飛ばして＝修行のため僧が各地を行脚する。⑩依止して＝力や徳のあるものに依存し、それを頼みとする。⑪麟鳳龍象＝非常にまれで珍しいもの、聖人・賢者のたとえ。⑫師資＝師匠と弟子。⑬『梵網古述記』＝新羅太賢による『梵網經』の注釈書。⑭『占察』『瑜伽』＝『占察善惡業報經』と『瑜伽師地論』のこと。⑮七衆＝仏教を信奉する出家者も在家者も含む信徒全般の総称。⑯斷金の契り＝友情のきわめてかたいたとえ。⑰續紛として＝多くのものが入り乱れているさま。⑱近事戒＝在家の信者。男を近事男、女を近事女が受ける五戒。⑲勤策戒＝沙弥が受ける戒。⑳大慈芻戒＝成人男子が受ける戒。㉑龍象＝徳の高い僧を龍と象にたとえた語。僧を敬つていう。㉒結界＝現前サンガの空間領域を設定することを言う。㉓羯磨＝業や行為のことだが、「所作・作法」を意味するようになり、様々な意味として多義的に用いられる。㉔服寺＝奈良市南京終町にあった寺院。㉕進具＝具足戒のこと。具戒、進具戒、大戒などともいわれる。㉖白四羯磨＝白（議題提起）一回の後、参加者にその賛否を三回問う形式。重要議題で用いられる形式。㉗闡明＝明瞭でなかった道理や意義を明らかにすること。㉘法性寺道家公＝撰政闡白九条道家公。㉙邪命得＝正しくない邪な方法で得ること。㉚四大不調＝四大の調和がくずれ、病気になること。僧の病気にいう。㉛僧伽梨＝比丘の三衣の一つで、重衣や大衣と漢訳される。九二十五条の袈裟のこと。㉜緇素＝俗人。㉝外縛印＝指先が見えるように外側に、両手で印を結ぶ場合の、内場印の裏表。㉞息慈戒＝沙弥（求寂・息慈）となる儀式。㉟法園寺＝京都府八幡市垣外にある。㊱月輪觀＝自己の心を満月輪のようであると観じる密教の基礎的観法。㊲諱辰＝命日のことで、人が亡くなった日のこと。㊳輪輿＝職人の事。㊴金碧間錯＝金色と青碧色がまじわること。㊵京畿＝京都・近畿の別称。㊶華夷＝文明の地と野蛮未開の地。㊷光被す＝君徳などが広く世の中に行きわたること。㊸補陀落山＝南インドにあると伝説的に信じられている觀世音菩薩の靈場。㊹平明＝夜明け。明け方。㊺子輿氏＝劉子輿。㊻孤雲野鶴＝世間から離れた隱者のたとえ。㊼扶桑＝中国における日本の異称であったが、それを受けて日本でも自国を扶桑国と呼ぶ。㊽吠畝＝田舎のこと。㊾釈氏たる者＝釈迦の弟子。また、出家して仏弟子となった者。僧侶。釈氏。

このたび唐招提寺中興大悲菩薩覺盛和尚の七百七十年御遠忌にあたり、第八十世北川智兼長老の口述、応量坊の松浦融海和尚筆受による大悲菩薩伝の校正を、西山明彦長老のご配慮により担当させて頂くことになった事は、人生の末期を迎えた小柄にとつて望外の喜びである。以下にその凡例を記す。

- 一、異体字は新字に改め、いくつかの漢字については仮名に開いた。
- 二、読み易さを重視し、句読点を入れて文章を区切り、「は」「が」を入れて主語を明確にした。
- 三、元号の下に西暦を附記した。年表では天皇名、皇紀の年号、中国の時代・年号を省いた。
- 四、文末に語句解説を設けた。

戦時中の昭和十九年、唐招提寺で智兼長老からその頃は得がたかったお菓子を頂戴したことや、兼務されていた壬生寺へのご来寺のようす、長老が遷化されて五条墓地に座棺による埋葬の有様を子供心にまざまざと覚えていた。大悲菩薩接化の跡、入滅の地である応量坊に住職した松浦融海は我が師であった。小柄は菩薩が授戒された聖守和尚を開山とする八幡市の法園寺を兼務し、智兼長老・松浦融海・俊海と壬生寺住持が三代も大悲菩薩の伝記に携われたのは、まさしく「共結来縁」。奇しくも来つたこの勝縁を共に結んだ事になった。

また、西山明彦長老門下の順證房に添削など、大いに協力をお賜った事に深謝する。
重ねて唐招提寺、大悲菩薩にご縁の深い多くの方々との来縁を、なお親しく結びたいと願うものである。

平成三十年十一月 法園寺・壬生寺貫主 松浦俊海